

Ⅱ キリスト教思想史の諸問題

<前回>生命倫理・環境倫理とキリスト教

- ・生命倫理：自由・自己決定原理の実現
- ・次元論から脳死議論へ
- ・土の塵から生きる者へ（神の息）：人間存在の有限性（他者へ依存し、生かされている）
キリスト教的原則：生命の最終決定者は神である → 人間の恣意的な判断の禁止
- ・科学技術の進歩と、選択の範囲の拡大（より自由に）
- ・「自己決定」をめぐる問題状況、臓器移植法改正をめぐる議論、自己決定原則の後退
- ・脳死・臓器移植をめぐる宗教的問題（問題の宗教的次元とは？）
 - ①生命の価値を決定するのは誰か：権利は神に、しかし、人間が責任を問われる
 - ②存在することの意味（創造の善性）：「にもかかわらず」無意味ではない
 - ③他者の死への依存（人間は関係存在である）
- ・欲望の実現は善か？ 自由も有限性を免れ得ない
- ・環境倫理の諸問題：平等の原理、全体性の立場 cf. 生命倫理
自然の生存権／世代間倫理／地球全体主義
- ・聖書は人間中心主義か？ 「地の支配」とは？
 - ・人間の固有の使命 → エデンの園の管理者・園丁
 - ・支配の王権イメージ：専制君主とイスラエルの王の理想（賢明な調停者）
 - ・「善悪の知識の木の実」を食べたことがもたらした結果としての地の搾取・破壊
+自然との関係をめぐる近代以前と以後における質的差異
- ・「地の僕」（創世記2章） → モデルの複数性と相補性
歴史の完成・目標としての終末論
モデルの統合＝「神－人間－自然」の関係性のヴィジョン
- ・希望のネットワーク（希望の組織化）の必要性

第5講：科学技術とキリスト教

2 心と情報

本講義も、今回で最終講義となり、「キリスト教思想研究への招待」も締めくくりとなる。最後のテーマとして、キリスト教思想研究でももっとも新しいテーマである、「心と情報」と取り上げたい。なお、最終講義であるので、次回の学期末試験の説明を行い、合わせて質問の時間をとりたい。講義自体は、通常よりも短めとなる。

- ・前回のテーマであった、生命論理・環境倫理が、1960-70年代に集中的に取り上げられるようになった研究テーマであったのに対して、情報の問題（情報化社会の倫理的問題を含む）は、1980-90年代以降の最新のテーマであり、その背景には、現実の情報化、IT革命（→グローバル化）の進展が存在している。
- ・「心」は、近代以降の自然科学の進展——物体・物質→生命→心——が、脳科学の研

究の発展において到達した最新の研究領域であり、現在、宗教と科学の関係論の展開にとっても、注目されつつあるテーマである。今回の講義では、主に「情報の問題」を中心に議論が進められるために、この心の最新の議論には触れることができない。関心のある人は、次の文献を参照いただきたい。

ポール・スワンソン監修『科学・こころ・宗教』（第13回南山シンポジウム 科学から見る「こころ」の意義）南山宗教文化研究、2007年7月。

1. 情報化社会とキリスト教

20世紀末の情報化社会の状況は、新しいタイプの宗教あるいは宗教活動を生み出した。キリスト教会もインターネット時代に突入した。日本の教会でも、現在パソコンは必需品になりつつあり（様々な文書・印刷物の作成、あるいは会計処理や名簿管理など）、インターネットの利用は教会活動（対外的と対内的）に新しい可能性を開いた。

ホームページを立ち上げ、様々な活動を広範にPRする、インターネットを利用しリアルタイムに日曜礼拝式を配信する、聖職者や信徒が個人のブログを通してキリスト教のメッセージを伝達したり、掲示板における双方向の交流を実践するなど。

こうした情報化に対して、キリスト教は比較的積極的に取り組んでおり、そこにキリスト教の特徴を指摘することができるかもしれない。IT技術の普及は、キリスト教にとって安価で小回りのきく活動を可能にしている。

しかし、宗教の情報化は、個人の情報の管理など、今後多くの問題を発生させることが予想される。とくに、問題は、作られやすい宗教・操作されやすい宗教の出現、あるいは宗教的実在性の変容（宗教の質的变化）といった点である。以下、これらの点にも言及しつつ、議論を進めよう。

2. キリスト教にとってのメディアの変化——聖書の普及を中心に——

聖書

写本 → 印刷 → ラジオ → テレビ・ビデオ → インターネット

キリスト教にとって、メディアとの関わりは、その発端にまで遡る。メッセージの伝達と自己表現の手段としてのメディアの存在は、キリスト教の本質に関わっている。

3. 宣教タイプの宗教としてのキリスト教

キリスト教と言っても、その活動は実に多様であるが、自ら確信する宗教的真理を外部に向かって意識的に伝達すること（＝伝道あるいは宣教する）を、その中心とする点では、ほぼ一致している。つまり、他の宗教に比較しても、キリスト教は基本的に宣教タイプの宗教と言える。礼拝などの儀式、教育や相互扶助の活動など、すべては、宣教と結びついている。

「18 イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。

19 だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、20 あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」（マタイ 28）

4. 宗教改革以降のキリスト教と宣教メディアの変化

- ・宗教改革の聖書主義（聖書のみ）と活版印刷技術の導入（グーテンベルク）

↓

すべての人が自分で聖書を読めるという理想に向けた歴史の推進

聖書の翻訳、安価な大量印刷、初等教育（識字率）の充実

現在聖書は 2300 を越える言語に翻訳され世界中に普及

印刷革命は聖書の普及だけでなく、宣教に関わる多様な印刷物（簡易な冊子やトラクト、ポスターから新聞や大部な出版物）を出現させた。

- ・その後もキリスト教はメディアの発達に即応して次々に新しい宣教活動を生み出した。

ラジオやテレビを通じた布教（＝マスメディアを介した伝道活動）

アメリカではラジオ伝道は 1920 年代より、またテレビ伝道は 1950 年代より始まり、とくに 1970 年代以降、テレビの宗教放送は大きな影響力を發揮し、アメリカの世論形成あるいは大統領選挙にもかなりの影響を及ぼしている。

5. 1980 年代になると、アメリカのテレビ伝道も最盛期を過ぎ、キリスト教会はインターネット時代に突入。IT 革命は、マスメディアに依存しないより安価で小回りのきく伝道を可能にしつつあると同時に、宗教としてのキリスト教のあり方を根本から変化させるものともなりつつある。それは、インターネット上においてのみ活動を行うサイバー教会、ヴァーチャル教会、ネット教会の出現である。

6. リアリティの変貌？

伝統的キリスト教は、自然と精神、身体と霊という枠組みで存在してきた。つまり、キリスト教は精神や霊をその核心にしつつも、自然の基盤の上に存立してきたのである。これに対して、キリスト教の情報化は、情報という新たな存在形態をキリスト教にもたらした。情報とはいかなるリアリティか、ヴァーチャル・リアリティは、宗教的実在とどのように関わるのか。サイバー教会は、現実世界の教会の役割をすべて果たしうるのか。自然的な基盤なしに、宗教儀礼は可能か？ 現実のパンとワインなしの聖餐式？

↓

これらはなおもキリスト教と言えるのか。

サイバー教会は現実世界の教会とどのような関係に立ち得るか。

7. 次元論から

実在の階層構造

ミクロのレベルにおける複雑度の増大とマクロのレベルにおける秩序の創発

物質 → 生命 → 心 → 精神

情報？

聖餐式における、キリストの現前とは、いかなるリアリティか？

カトリック教会：実体変化

ルター：共在 (consubstantiation)

ツウイングリ：記念

サイバー教会の聖餐式には、キリストは現在するか？ あるいはその実在性とは何か。情報としての現前？

これは、霊や神の実在性とは何か、という問題に新しい観点を提示したとも言える。

8. 宗教における情報化されないリアリティ

情報化には、宗教における情報化できないものの存在を改めて浮かび上がらせるという意味もある。

密教的伝達（仏教）

間接的伝達（キルケゴール）

隠れた神（ルター）

キリスト教においては、情報化される事柄に対して、その背後で情報化される事柄を可能にしつつも、それ自体は情報化されない（情報としては汲み尽くし得ない）実在が存在しており、むしろそれがキリスト教を支えていると言えるかもしれない。情報化は、こうしたキリスト教という実在のあり方を掘り下げて考える契機になり得るように思われる。

<参考文献など>

1. 西垣 通 『聖なるヴァーチャル・リアリティ』岩波書店
2. 生駒孝彰 『インターネットの中の神々』平凡社新書
3. 池上良正・中牧弘允編 『情報時代は宗教を変えるか——伝統宗教からオウム真理教まで』弘文堂
4. 水谷雅彦 『情報の倫理学』丸善
5. 水谷雅彦編『応用倫理学講義 3 情報』岩波書店
6. 芦名定道他 『科学時代を生きる宗教—— 過去と現在、そして未来へ』北樹出版
7. キリスト教諸教派や諸教会におけるホームページの普及については、次の Web 頁を参照。<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/user/sashina/sub16d.html>。